

この時代の町の暮らしは、町^{ちょう}単位を基本として営まれていた。その町では、自らの生活環境を守り、快適に暮らすために町人同士で「町式目^{ちょうしきもく}」と呼ばれる町独自の規則を定めた。

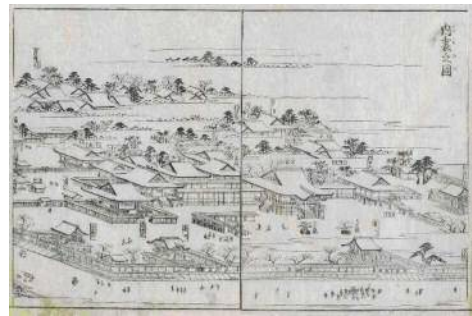
社会の安定が続くと、経済も順調に成長し、都市住民の生活が豊かになるとともに、様々な技術の進歩に伴い建築技術も発達した。そして、今日の京町家の原型が形成され、この京町家は、京都の文化の伝播^{でんぱ}とともに全国各地に広がり、全国の町家建築に大きな影響を与えてきた。

現在も市内に多数残っている京町家の源流は平安時代まで遡ることができるが、今日見られるような洗練された京町家の原型が完成したのは、江戸時代の中期以降である。技術の発達は、京町家のなかで営まれる都市住民の暮らしにも大きな影響を与えていった。奥の庭を前にした畳敷きの広い座敷では、お茶・お花・句会などが営まれ、ここでの情報交換を大切にしていた大店の暮らしが、庶民の暮らしにも徐々に広がっていった。こうした暮らしの文化を背景として生産された京都の産物は、全国各地で、「下りもの^{くだもの}」として珍重され、京都の活性化に大きく貢献した。

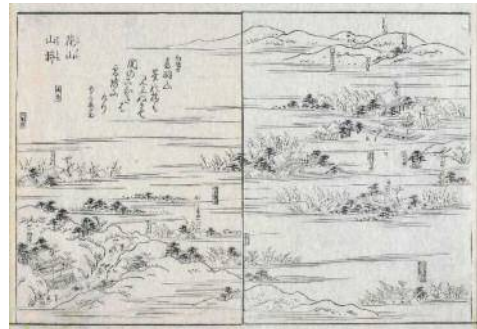
また、戦乱から開放された市民は、古代・中世以来受け継がれてきた遊山・遊楽といった屋外の遊びを、庶民の遊びのパターンとして創りはじめた。この遊びの有様は、「洛中洛外図屏風」などに描かれているが、四季折々の名所、参詣する寺社の「京内まいり」が、京の庶民ばかりでなく、他国の人々にまで及んで京の価値を生み、「京風」を認識させていった。

この遊山・遊楽の盛行は江戸中期に入って、全国的な旅行ブームが招来されてくると、いっそう拍車をかけられることになり、観光名所・観光寺院・観光土産といったものがつくりだされ、さらにこれが各種の京都観光案内書などの出版物を通じて広く宣伝された。

幕末の混乱期には、各地で争いが行われていたが、京都においても、蛤^{はまぐり}御門の変により京都の中心部が激戦地となり、現在の中京区・下京区のほとんどの地域が焼失した（どんどん焼け）。また、伏見や下鳥羽、淀でも大規模な戦闘（鳥羽伏見の戦い）があり、伏見の町が焼失した。



内裏之図(御所)



山科

図 1-13 都名所図会 国際日本文化研究センター 所蔵

江戸時代の代表的な建造物

この時代の代表的な建造物として二条城（二之丸（国宝、重要文化財）他）の築造以外には、江戸前期に清水寺本堂（国宝）、知恩院本堂（御影堂）（国宝）、教王護国寺五重塔などが焼失により再建されている。また、江戸中期から後期頃に花街の一つである島原に角屋（重要文化財）や、江戸末期には、裏千家住宅（今日庵他）（重要文化財）が建築されている。



写真 1-11 二条城



写真 1-12 清水寺本堂



写真 1-13 教王護国寺五重塔